

フィールドネットラウンジ企画報告書

東北大学
ボウ サラ
2026/3/5

○企画名：屠畜と食肉が創り出す秩序と倫理——アジア諸地域の比較民族誌的研究

○企画責任者：包 双月（ボウ サラ）、東北大学大学院文学研究科

○アドバイザー：澤井充生、東京都立大学

○日時：2026年2月1日（日）14：00—18：25

○場所：東京外国語大学（東京都府中市朝日町3-11-1）、アジア・アフリカ言語文化研究所3階マルチメディアセミナー室（306室）

○プログラム

14：00—14：05 Fieldnet からの挨拶

14：05—14：10 趣旨説明 ボウ サラ（東北大学）

14：10—14：40 中川加奈子（追手門学院大学）

「振動」と屠ることの断片的正当化——ネパール「供犠・肉売りカースト民」による太鼓の演奏と超自然的力の感受

要旨：本発表では、西洋発の動物福祉や公衆衛生概念の浸透を受けてさまざまな批判が生じている屠畜をめぐる、カーストに基づき伝統的に動物供犠と屠畜・肉売りになってきたカドギたちの儀礼面・商業面での実践を考察した。その際には、カドギたちの動物供犠の際に必ず演奏される太鼓と、その「振動」が神の臨在の感覚と結び付けられて感受されていることを手掛かりとして、叙事詩的な大きな物語に回収されない、行為者起点で断片的な屠畜の正当化が行われている様相を描出した。さらに、屠畜の不可視化や周縁化に対抗する際、屠畜を正当化する言説が援用されていることを指摘した。

14：40—15：10 西川慧（石巻専修大学）

「在来の鶏」とは何か——インドネシアにおける食肉市場の拡大と屠殺をめぐる

要旨：本発表では、インドネシアにおける食肉市場の拡大を踏まえつつ、西スマトラ州における供犠においてどのような変化が起きつつあるのか検討した。その結果、ブローラーの日常生活への浸透を背景として、それとは異なる「在来の鶏」が供犠の対象として浮かびつつあることが明らかになった。「在来の鶏」は住民の日常生活との連続性に

において供儀の対象として適切とされている一方、「在来の鶏」の品種改良や飼育方法の変化が供儀の実践に及ぼす影響については、西川の今後の課題とした。

15：10—15：30 休憩

15：30—16：00 ボウ サラ（東北大学）

食肉産業の展開が生み出す新たな秩序——内モンゴル自治区における肉製品市場の拡大を事例に

要旨：モンゴル人社会においては、屠畜行為に対する強い宗教的規制は存在しないものの、「命をいただく」ことへの敬意を払う実践が見られる。近代化以後、中国領内のモンゴル人の屠畜行為には「伝統」の持続と新たな屠畜方法の導入が併存しており、近隣諸民族の影響を受けていることを提示した。さらに、観光業の拡大とオンラインショップの普及に伴い、牧畜民は肉を商品化し、経済的利益を獲得するようになっている。すなわち、モンゴル人社会において、屠畜行為よりも肉食行為に大きな変化が生じていることを明らかにした。

16：00—16：30 澤井充生（東京都立大学）

カッサブはウンマの民にあらず——回民社会における屠師の職業倫理と共同体の秩序形成

要旨：本発表では、中国における近代的屠場成立、社会主義改造、改革開放政策などの社会変動を俯瞰したうえで、神の名において屠畜を担当する宗教職能者（屠師）がいくつもの禁忌を課せられるという両義的性格に注目し、回民社会の共同体秩序が屠師の職業倫理をかたち作りながら屠師を周縁化し続けることの意味を明らかにした。すなわち、屠師の周縁化の背景には、清真寺の信徒集団のあいだで醸成されてきた殺生罪業感および血の不浄観があり、これらの否定的価値観が回民社会の秩序形成に必要不可欠とされてきたのである。

16：30—17：00 別所裕介（駒澤大学）

家畜のより善い手放しかた——チベット牧畜民における“儲け”と“罪障”の相殺をめぐって

要旨：本発表では現地チベット牧畜民にとって「より善い」と考えられる家畜の手放し方について、2つの地域を比較しつつ検討した。冬虫夏草の収入で家畜経営を代替できるA地域ではヤクの放生や羊飼養の放棄といった「より善い」手放しによって罪障を滅却することが可能となる一方、羊放牧に頼らざるを得ないB地域では蓄積する罪障を贖

罪儀礼の強化によってカバーしている現況が明らかとなった。

17：00—17：20 休憩

17：20—18：20 総合討論

18：20—18：25 閉会の挨拶 澤井充生

○実施報告「屠畜と食肉が創り出す秩序と倫理——アジア諸地域の比較民族誌的研究」

私たち人間は肉の摂食を一般的に行ってきたが、その行為は単なる栄養摂食にとどまらず、宗教的供犠や儀礼的实践として、古くから人類学の重要な関心対象であった。近年、欧米社会を中心に、動物倫理および権力、環境問題と結びつきながら、近代的畜産業、屠畜、肉食行為をめぐる、かつてないほど強い批判や社会的関心が呼び起されている。こうした社会動向を鑑み、本企画では、屠畜および肉食行為が創出する秩序・倫理・権力について、アジア諸地域における人類学的フィールドワークを通じて、民族誌学的視点からの比較分析を行うことを目的とした。具体的には、①屠畜と宗教的实践、②食肉生産の制度化と国家規制、③屠畜者の社会的役割およびその変容、④動物倫理やヴィーガニズムとの交差といった分析軸を設定し、各地域における屠畜や肉食の実践を比較検討した。

今回の企画では、ネパール、中国（チベット人、モンゴル人、ムスリムである回族などエスニック・マイノリティを対象とした）、インドネシアなどアジア諸国における屠畜と肉食行為についての文化的・宗教的・社会的といった多面的な分析を通じて、屠畜と肉食行為は一般的行為であるがきわめて多様であることを具体的な事例から報告した。近代化以後、工場畜産の導入や屠畜場の誕生によって大量屠畜が可能となり、それに伴い、近代的衛生基準や管理体制を国家が法制度として整備してきた点が共通していることがわかった。さらに、市場経済の浸透により家畜の商品化が進み、肉の流通が国境を越えて展開するなかで、工場畜産が牧畜業に間接的に及ぼしている影響を明らかにすることができた。

中川の発表では、ネパールのカドギのコミュニティにおいて、「供犠の演奏における振動＝神の臨在」がどのように理解されているかを分析し、それが命をいただく行為への文化的な解釈になっていることを報告した。西川の発表では、食肉に対する規制が強いイスラム社会においても、経済成長に伴って肉の消費量は増加しており、工場畜産によって短期間で肥育されたブロイラー（ニワトリ）の登場を契機に、在来の放し飼いのニワトリが「在来鶏」として再認識・再評価されるようになったことを明らかにした。

さらに、儀礼的利用の実態を通して、肉消費の変遷とそれに伴う文化的現象についても報告した。ボウの発表では、中川、澤井、西川らの研究報告とは非常に対照的に、屠畜に対する規制がきわめて緩やかなモンゴル遊牧民の事例を紹介した。中国という巨大な市場を背景に、内モンゴル自治区のモンゴル人は、「伝統的」な肉の食用方法に基づいた肉製品の商品化を試みており、観光業の拡大とオンラインショッピングの普及を通じて、その商品化に成功していることを報告した。また、「大草原」をブランド化することで、経済的利益を獲得していることが明らかになった。澤井の発表では、中国領内のムスリムである回族に着目し、近代国家が成立する過程において、近代的屠畜場が導入されるとともに、屠畜行為が都市部から排除され郊外に配置されていったこと、さらに屠畜者に対して各種の禁忌が制度的に課されるようになった実態を報告した。別所の発表では、仏教徒である中国領内のチベット人に着目し、家畜の屠畜のみならず家畜の販売に対しても罪悪感を抱くチベット仏教の生死観が、家畜飼育や家畜の屠畜の実践と深く関わっていることを報告した。さらに、贖罪の行為として家畜を手元に温存する結果、経済的損失を被るという矛盾した現象が確認された。また、当日、来場の方々から、屠畜や動物倫理の問題は文化的・宗教的・倫理的問題だけでなく、国家統治を含む政治・経済的問題であるという刺激的なコメントがあり、総合討論の時間に活発に議論を行うことができた。

今回の各発表者の報告から明らかになったように、「命をいただく」という屠畜行為に対しては、いずれの社会においても敬意を払う実践が見られた。また、国民国家の形成や市場経済の浸透が、従来の屠畜行為および肉食のあり方に大きな変化をもたらしてきたことが示された。しかし同時に、西洋近代的な倫理観や家畜飼育に関する法制度が非西洋社会へと拡大する過程では、それぞれの社会の宗教的・文化的・社会的状況によって受容のあり方が大きく異なることも明らかになった。

今後の課題としては、フィールドワークに基づく具体的事例を通じて、屠畜および肉食行為をめぐる倫理的批判と日常的な生活実践とのあいだに存在するズレや緊張関係について、議論の可能性を探っていきたい。あわせて、西洋的理論を参照しつつ、非西洋社会の事例分析からそれらを相対化し、「人間以上 (more-than-human)」の人類学との対話を試みることで、存在論的転回以後の人類学に対して応答していきたい。また、来年度には科学研究費による共同研究の申請を予定しており、現在その準備作業に着手している。研究対象地域としては、欧米や中東などを専門とする研究者を招聘するとともに、肉食行為を相対化する視点として菜食主義者も視野に入れ、論集の出版も企画している。